

# 意識の価値に関する哲学的諸見解は使い物になるか

太田 紘史 (Koji Ota)

新潟大学人文学部

仮に将来のヒト脳オルガノイドにおいて意識が形成されるとしても、それがどのような仕方で倫理的問題をもたらすのかについては不明な点が多い。既存の倫理学的研究の一部は、この点を検討するうえで意識の価値に関する哲学的諸見解が手がかりになると考えているようである。それらの哲学的諸見解はどれも、現象的意識の内在的価値に焦点を合わせるものであり、そのうち主要な見解は、現象的意識が正の内在的価値を持つという見解（正価値説）と正負いずれの内在的価値も持たないという見解（中立説）である。一方で正価値説が直観的に訴えるところでは、例えばあなたが実際の通りに生きている場合と、まったく現象的意識を欠いたまま（しかし物理・機能的には全く同様に——つまり現象的ゾンビとして）生きる場合では、明らかに前者のほうが望ましい。これが意味するのは、いわく、現象的意識が正の内在的価値を持つということである。これと対比されるのが、中立説である。中立説によれば、現象的に意識的であること自体は、内在的な価値を持たない。むしろ現象的に意識的な心的状態は、何らかの追加的性質との組み合わせにおいて価値を顕現する。おそらくこの考えのもっともらしい具体化は、意識的な心的状態は正のヴァレンス（価値）を有すること——例えば快を伴うこと——のゆえに正の価値を持つというものである。

本提題の目標は、こうした意識の内在的価値に関する哲学的諸見解と、ヒト脳オルガノイドに関する倫理的問題の間に、どれくらい実質的なつながりを見出せるのかについて精査することである。結論から言えば、こうした哲学的諸見解によってヒト脳オルガノイドの意識にまつわる倫理的懸念を説明できる範囲は限られている。これは、それらの哲学的見解が内在的価値と道徳的価値の関係性についての説明を不明瞭なままに残していること、あるいは内在的価値と道徳的価値を単純に混同していることによる。今回の提題ではこの点について考察を進めたうえで、両者の関係性について道徳的地位の観点からどのような接点を見出しうるか検討し、とりわけ意識的なヒト脳オルガノイドの作成に対する倫理的懸念を説明するような概念的つながりが（あるとすれば）どのようなものになりうるのかを検討する。